授業方法について，独自に工夫している点と，アンケート結果を受けての改善点【人文社会学系】
「授業者の顔は見えないまでも、声だけは届けたい」「テキストと音声を通して、『ラジオ講座』のような授業が展開したい」と考え、それを行ってきました。録音が聞きづらい等があれば、学生のみなさんに申し訳なく思います。 指導法という科目の性格上、「場面指導」や「模擬授業」を行う必要がありました。しかし、本学は指導法の履修学生が多いことから、一人一人に十分な模擬授業を行ってもらう時間がありません。そこで、iPadに「場面指導」や「模擬授業」を録画させるという方法を考えました。また、今後学校現場では、教師も子供もPCやタブレットを使用する機会が増えることや、教師がデジタル教材を使用して授業を行う機会が増えることが考えられます。そこで、iPadを活用することで履修者全員に小学校外国語のデジタル教材にふれて欲しいと考えました。まだまだ改善の余地はありますが、ほぼ、当初の計画通りできたのではないかと思っています。 指導方法を知り、指導技術を高めることを目的とした授業であったため、（理論的な）知識の理解を深めるという内容の授業ではなかったことから、知的好奇心をくすぐるような時間とはならなかったのではないかと思います。その点、満足できない学生さんがいましたら、申し訳なく思います。小学校における「これからの外国語の授業」を経験することで、授業のイメージをつかんでくれることができればよかった、そう思います。ありがとうございました。
後期の授業科目については、「問1」「問2」ともに、すべて80%以上であったので、内容的には評価されていると考えるが、今年は新型コロナウィルスの影響で、対策として遠隔授業、あるいは対面にしても受講者を半分にせざるをえないなど、対応を余儀なくされた。その点、学生にとっても不満に思われる点があったことはやむをえないと思っている。また、授業の進め方やレポートの提出の仕方など、工夫すべき点を指摘いただいたことは今後に生かしていきたい。コロナ禍がいつまで続くかわからないが、学生の学びの質的な保証を確保したいと思っている。
好きな時間に受講できるオンデマンド型を便利と感じる声に接し、その方式をとってよかったと思った。動画には止めたり繰り返したりできる利点もあり、それもよかったと思う。 担当した全科目を概観し、まずまずの評価ではないかとの印象を受けた。前期に比べ、教員・学生双方が遠隔に慣れ、アジャストできてきたのかもしれない。
講義形式の授業は、概して演習形式のそれに比べて受講者の積極的な授業参加の様子がうかがいにくい。そこで、なぜそれを取り上げるのか理解を深めた上で入ったり、自身の頭で考える機会を設けたりすることなど、工夫を心掛けている。 現場ですぐに役立つ個別的、実践的話題に終始せず、汎用性のある、本質的な知識の体系に触れさせる機会をなるべく提供するようにしたいと考える。
E科目 アンケートの回答者数が6名であり、回答者数が少ない。授業での学びは、前半が教育学・教育心理を通した学びであり、後半は英語授業科目であった。アンケートに従えば、学生たちが主体的に学んでいると考えた内容を彼らがどのように捉えたかにより、学びの深さは異なるものと思われる。
M2科目 概ね受講学生は、内容等を深めたものと考えられる。授業では、コロナ禍の下で、丁寧に遠隔授業に関わる資料作成を行った。これらが、学生の主体性に寄る部分も大きく、彼らの学びの過多は、学生の主体性によるものと思われる。
S科目 必ずしも、学生の評価は高くない。この授業に関わり、コロナ禍で対面による授業展開ができずに進められた。学生の評価を受けて、内容及び提示にさらなる改善をしたいと思います。
Sj科目 自分が担当する場合は、そのたびに一つのテーマにしぼって授業を計画している。今年度は、「語彙」をテーマとした。日本語が中心だが、他の言語の語彙にも言及した。結果的に少人数のクラスとなったため、授業のやり方などをそれに合わせ、インタラクションも当然増加したので、学習効果はあったと感じている。

Sj科目
新規の授業で、教えるのは初めてでもあり、手探りであった。音声・動画を使った英語の授業を目指したが、教科書などを使うのではなく、インターネット上で公開されている学術講演などを視聴した。少々難しかったかもしれない。

S科目
かなりくだけた教科書を使ったので、もう少し専門的なコンテンツを使用して授業に組み込んだが、あまり成功していないかもしれない。また、英語のポップスを息抜きに使ったりもした。もう少し歌詞を紹介してS科目と融合できればよかったが、余裕がなかった。

1　私の授業では、パワーポイントを使うことが多い。しかし、レジュメを配布することがなかったため、配付してほしいと学生から言われていた。ただ、昨年から新型コロナウィルスの影響もあり、Teamsをもちいることが多くなった。Teamsにはファイル置き場があるため、そこに資料をおくことによって、学生からの希望に応えられるようになった。また、Teamsを使うことで、いろいろな形の授業方法ができるようになった。コロナがおさまったことで廃止するのではなく、これからもできるだけ利用しようと思っている。学生もそれを望んでいるようである。

2　新型コロナウィルスに影響があるため、学生が大学に来られないときには、Teamsなどで対応するようにしている。

L科目では、対面での講義と、オンラインでのグループ討論を組み合わせ、ナショナリズム、中国の「中華民族」論、そして歴史学という三つのセッションについての授業を行っている。新型コロナウイルス感染症の拡大を受けて、リスクの高い対面での相互討論を取りやめ、やむなく各グループ内で時間をあわせてTeamsのビデオ通話での討論を実施してもらい、結果を報告・提出させる形にした。授業は基礎的知識の獲得のみならず、思考力・判断力・読解力、そして討論を通じたコミュニケーション力の向上を目指している。本来は討論こそ対面で行うべきものであり、オンラインでの実施は苦肉の策であったが、感染拡大の予防には効果があったと思われる。
　アンケートの問1「授業で指示された課題・参考文献・資料などを参照した上で、自分で問題点を深く考えた。さらに、その考えに基づき行動した。」の回答は「強くそう思う」が42%、「ややそう思う」が38%であり、全体の8割が肯定的であった。また問2「授業を受けた上で、自ら関連項目について文献やインターネットなどで調査し、新たな思考を展開した。さらに、その思考に基づき行動した。」の回答は「強くそう思う」33%、「ややそう思う」46%と、こちらも約8割が肯定的であった。受講生には批判的な思考力や、自ら学習を深めたり広げたりする力をある程度身につけてもらえたように思われる。
　自由記述では、良かった点として「遠隔でも討論を実施することで他の意見を知ることができ、考えるを深めることができた」、「討論がオンラインになったのは残念だが、興味深い授業であった」、「感染症予防に有効であった」という意見があった。また「対面での先生の熱意のある授業、面白くとても勉強になりました」とか「対面授業も丁寧な説明で分かりやすかったです」という意見もあり、対面式の授業のよい部分も認められる。一方、「対面式の授業の内部でも、もうすこし他のグループの意見が聴きたかった」、「対面授業が一方的になりがちであった」などの意見もみられた。
　以上から、ハイブリッド式の授業として当初の目的をかなり達成できたが、対面での相互の学びや発表をより充実させるべきこと、オンラインでの討論の質を高めること、が爾後の課題となると考える。

　M2科目では、対面式の講義とディスカッション、オンラインでのグループワークとを組み合わせた形で授業を展開した。おもに高校世界史の教科内容を軸として、用語の削減問題、思考力・判断力を養成する授業の試み、そして試験問題の実験的な作成という3つのサイクルによって教科の現状と課題の把握、そして歴史総合の開始に向けた新たな歴史教育の模索を行った。
　アンケートの結果では、問1「授業で指示された課題・参考文献・資料などを参照した上で、自分で問題点を深く考えた。さらに、その考えに基づき行動した。」では、「強くそう思う」が回答者の29%、「ややそう思う」が同じく71%であった。また問2「授業を受けた上で、自ら関連項目について文献やインターネットなどで調査し、新たな思考を展開した。さらに、その思考に基づき行動した。」では、「強くそう思う」が回答者の43%、「ややそう思う」が回答者の57%であり、回答してくれた受講生の反応は概ね肯定的であった。
　自由回答では「高校の免許を取れるよう目指して講義を受けていましたが、大学における他の授業ではこうした高校の授業について考える機会はあまりなかったので貴重なものとなりました。ありがとうございました。」という声があった。
　後期の年末年始は新型コロナウイルス感染症の感染拡大が進んでいた時期にあたり、当初は対面式で授業を進めたが、グループワーク（授業案の作成・発表と試験問題案の作成・発表）は、対面でのディスカッションは1回のみで、あとは各グループごとのオンラインでのディスカッションと発表に切り替えた。感染予防には一定の効果があったと思われるが、発表は、できれば対面式で実施したかった。
　以上から、当初の目的は概ね達成したと考えるが、反省点としては、M2科目の課題に加え、新しい試みをより詳しく伝えること、受講生各グループによる授業案と試験問題案に対する相互の批評と討論をより充実したものにする工夫が必要であると考える。

S科目では、おもにレジュメと板書というオーソドックスなスタイルにより、授業を進めている。東アジア世界の歴史的展開を理解するため、「冊封体制論」や「天朝体制論」・「互市体制論」、「内臣・外臣構造」などの重要な学説を紹介しつつ、古代から明清時代までのトピックを概説している。工夫としては、教員による先行研究の検証や、受講生による論文・高校教科書の読解やコメントシートの提出、コメントへのフィードバックなどを通じて、単なる知識の吸収ではなく、批判的な思考力の養成を目指している点が挙げられる。

受講生からのアンケート結果では、問1「授業で指示された課題・参考文献・資料などを参照した上で、自分で問題点を深く考えた。さらに、その考えに基づき行動した。」では回答者の全員が「強くそう思う（38%）」「ややそう思う（63%）」のいずれかであった。また問2「授業を受けた上で、自ら関連項目について文献やインターネットなどで調査し、新たな思考を展開した。さらに、その思考に基づき行動した。」でも回答者の全員が「強くそう思う（25%）」「ややそう思う（75%）」のいずれかであった。

また自由記述では、「歴史学者が述べていた論の問題点が非常にわかりやすかった」、「ノートの書き方もわかりやすかった」、「対面授業なので緊張感を持てて集中して講義を聞くことができ身についたと感じる」といった好意的な評価があった。反面「ついていくことに必死だったため、もう少しゆっくり進めて頂きたかった。また、グループで考える時間なども欲しかった」という意見もあった。

この結果から、授業で企図した目的はほぼ達成できていると考えるが、内容がやや詰め込みすぎであることが反省点であり、相互討論の導入などアクティブ・ラーニングの充実が改善点である。ただ、相互討論は感染予防の観点から実施が難しかったのも事実である。パンデミック終息後は相互討論や発表などを取り入れたいが、感染がおさまらない時期では、例えば学生相互でのビデオ会議によるグループ討論とその結果の報告などの形を取り入れることも模索したいと考える。

S科目
全体として、ポジティブな評価であったので、大きな不足はなかったと判断した。
特に工夫したのはどの授業もオンデマンド受講と対面受講の両方に毎回対応したことである。アンケートによると、そのことが、対面受講生の復習にも役立っていたようで、良かった、今期の授業でも同様にしている。

一方で、一部の授業において教室が密であったのが不安だったとの回答があった。既定の割合に沿って実施したが、それが必ずしも学生の感覚と会うわけではないということが分かったので、以後、気を付けたい。

今回のアンケート回答者が極めて限られていることから，声なき声が知りたいと感じた。S科目では，遠隔でありながら学生が司会進行を行うことが評価されていたが，対面でも同様に行っている。学生同士の議論にはなかなか発展しないので，そこを工夫する必要があると常に思っているのだが･･･。

S科目
工夫している点は、歴史的背景と文学作品の関連性を意識した資料作り。またそれぞれの時代を最も反映している作品を選び、その作品の中で内容において、また英語として面白いものを選んでいる。
アンケート結果については、回答率が１７．４%と極めて低いため、判断が難しいが、問1と問2において、ともに「強くそう思う」と「ややそう思う」を合わせて90%に近いので、授業としてはかなり上手く行っていると考える。自由記述で「スライドに音声を付けてほしい」との意見があるので今後検討したい。対面と遠隔のハイブリッド方式であればこうした問題はかなり解消するものと考える。

S科目
工夫している点は、資料を事前に提示し、それを踏まえて授業を行う反転授業形式と、英語によるグループ討論の時間を二週に一回取り入れていること。
アンケート結果については、問1と問2において、ともに「強くそう思う」と「ややそう思う」を合わせて７５%を超えているので、授業としてはある程度上手く行っていると考える。自由記述で「対面でないため、授業の緊迫感がない」との意見があるが、対面と遠隔のハイブリッド方式の授業であったので、記述の意図がよく分からない。もう少し問題点を具体的に書いてほしかった。

S科目
工夫している点は、毎回担当を決めて発表させ、それを基に討論の時間を多く取っていること。
アンケート結果については、回答率が２５%と低いため、判断が難しいが、問1と問2において、ともに「強くそう思う」と「ややそう思う」を合わせて１００%であり、授業としては成功していると考える。

オンデマンドの授業に関しては、自分のやり方が「独自」なのかどうか、他の先生方の例を知らないので何とも言えないが、学生が使い慣れているであろうYouTubeをツールとして配信を行った。「改善」とは呼び難いであろうが、なるべく対面の講義に近い形態の授業を心がけた。

授業中、不適切な質問をしたことに対して、受講者に不愉快な思いをさせてしまったことを反省し、今後このようなことがないように十分配慮した授業を実施していこうと思っております。ペアワークを実施するにあたり、どちらか片方に負担がかかっていること、その場合の評価への疑問については、具体的な担当分けを明確にする等の改善を図りたいと考えています。

アンケートの回答率そのものが低いのでなんとも評価しづらいが、どの授業もおおむね「強くそう思う」「ややそう思う」だったので、学生の理解を得たものと考える。独自の工夫というのは特にないが、パワーポイントとプリントで講義するスタイルなので、ディスカッションがなかったことや、教室がせまかったことでコロナ対策を心配した生徒もいたようだった。

S2科目の授業では、教職大学院生にも積極的に参加してもらい、学部3年生の模擬授業の検討やアドバイスをしてもらったり、見本となる授業を実際に実施してもらったりするなど、学部と大学院の連携を意識して取り組むことで、受講生の満足度を高めることができた。

遠隔授業では、受講生の質問に丁寧に返答することを心がけた。課題の提出に関しては、受講生が多いため一人一人にフィードバックすることは難しいが、自分の課題が受理されているのか受講生が不安に感じることのないよう、今後工夫していきたい。

S科目については、授業内容の性質から、受講生には授業外での課題をできる限り課し、併せて、教員からは、個々人の内容に対応したフィードバックをするようにしています。また、口の中の動きについては、視覚的に理解しやすいように、映像を適宜用いています。また、適宜、発表等を入れ、授業の流れに少し新鮮さを出すようにしています。

S科目については、卒論に取り掛かるうえで必要となるデータ分析の知識・技能を身につける必要がありますので、実際にパソコンを用いてその演習を行っています。また、レポートもその形態に近いものにしています。こういった内容のため、自分で調べるという機会があまり多くなかった気がします。

S科目については、今年度、初めて担当の授業で、また、すべてを学生主体の発表にしたため、目的意識を持つ受講生にとっては、色々な点を調べることができたと思います。一方で、時間の都合と教員の専門性の不十分さもあり、発表内容について、あまり教員からのフィードバックができなかったため、さらなる自己研鑽と教材研究を進めていきます。

F科目の授業は、発音練習が不可欠であり、オンデマンドでの学習が極めて難しい。しかし大きな声での発音することが主となる授業を対面で行うのはあまりにリスクが高すぎるため、下記のような配慮をし、受講生全員に同意を得て一部teamsによる双方向の授業を行った。
(1)場所がない、という意見が最も多かったため登校している学生のために、本来の教室を場所として提供した。
(2)人が集まるのを防ぐため、授業を前半後半にわけて、教室にとどまらないように指示。
(3)事情によりその時間に受けられない学生については、休み時間や曜日を変えて対応。
結果としては全員がteamsでの発音練習に、隔週で45分の形で参加でき、授業アンケートでも自由記述欄で特にこの発音練習について満足度が高かったことを複数人が触れていた。
あくまで原則の規定としては対面かオンデマンドかの二択が原則であることは承知しており、苦肉の策としてしたものである。相対的に発音練習の重要度が下がった今年度ではオンデマンドのみにしている。アンケートを参考にする限り満足度は下がってしまうことが懸念されるが、仕方ないことと覚悟している。

遠隔授業に切り替わらざるを得ないものがあったが、知識を共有する点は文章を丁寧に記述するよう心掛けている。学生としては課題提出の期日がまなびネットの確認となっているので、まなびネットを使わない教員としてはまなびネットでも課題の期日を設定するなどの配慮が必要だった。そのほか、対面時では課題がそこまでハードに感じられなくても、遠隔では課題をハードに感じるようなので、課題の心的負担について考えなければならないと感じた。

演習科目については、事前に打ち合わせることを課している。したがって、受講生は自ら調査する必要がある。しかしながら、授業外での学習について、予測していたほどの割合ではなかった。文献や資料調査の時間が増えるように、助言していきたい。

2020年度後期の担当授業は、学部の教科専門3科目また、共通科目としてF科目を2科目、担当しました。このうち、4年生対象のゼミ科目を全て対面方式で、その他の授業については、まなびネットを利用したオンデマンドの授業を行いました。
まなびネットを利用したオンデマンドの授業については、どの授業についても独自の教材を作成し、毎回、一週間の期限を設けて課題を出しました。昨年までの対面方式の授業でも、ハンドアウトは毎回用意していたのですが、今年度はオンラインでの授業となったため、対面の場合よりもポイントを絞り、その分、説明を丁寧にするように心がけました。また時間の許す限り、毎週、受講者全員に対してフィードバックコメントを返すようにしました。他授業での課題と合わせると、トータルとして膨大な量となる点を考慮して、記述式の課題の他、短いクイズ形式も取り入れ、学生の負担が重くなり過ぎないように気を付けました。
オンデマンドの授業を担当する側としても、毎回、全員の受講者にフィードバックを返す方法だと、教材作成のための時間や労力と合わせると、一年を通して、体力的にも、時間的にも厳しい作業となったことは確かです。しかし、対面方式の場合どうしても、教室でなかなか発言できない学生もいるため、全員に対して公平な対応ができているかというと、必ずしもそうとは言えません。そのため、まなびネットのフィードバック機能を用いて個別対応が可能な点は、オンデマンド授業のたいへんなメリットであると感じました。
このように対面方式の場合、なかなか質問が出にくい場合もあるのですが、オンライン授業では、メールや掲示板を通じて、より多くの質問があったと感じました。また、そうした質問と回答のやり取りを、受講者全員に周知するため、それらをとりまとめ、文章化した上で、改めてアップロードして全員から意見を募りました。そうした作業を重ねていく中で、授業担当者も、自身の考えを深めていくことができました。受講者からも、フィードバックや資料作り、質問への対応についての評価を多数いただくことができ、オンデマンドであっても、双方向的な授業を構築することはできていたのではないかと思います。

上記コメントとは別の授業になりますが、フィードバックが丁寧であったことを評価する半面、「分からないところを気軽に聞きにくい」「対面の方がもっと深く学ぶことができたと感じている」のような意見もありました。
まなびネットでの授業とは別に、当該の授業時間中に、質問がある場合には研究室に来るように指示はしてあったのですが、研究棟の方へ足を踏み入れるのがためらわれたのか、そのためだけに大学に足を運ぶのがためらわれたのか、あるいは仲間同士でスタンドプレーと受け取られることへの懸念があったのか、実際に質問に訪れた受講生は一人もいなかったので、対面での指導を望む学生に対する授業方法については、今後の課題と受け止めています。
その他、F科目の授業については、「私自身英語を話したかったので、ZOOMでもよいので英語を使う機会を設けてほしかった」という意見もありました。
同じくF科目の授業ですが、「対面ではどのような授業展開なのか、気になりました」という意見がありました。オンラインになるまでは、評価にどうしてもTOEICが評価に入ってくるため、そのための対策授業を行うこともありましたが、それ以外には、英語音声学の初歩的なテキストを用いた演習を授業前半で、映画を視聴した上での会話練習やリスニングを授業後半で、行う場合が多かったと思います。
作文を取り入れた年もありましたが、この点については、紙でのやり取りとなるため添削と返却に手間がかかる対面での授業に比べると、まなびネットを介したやり取りははるかに手軽で、しかもその都度のフィードバックが可能であるため、教育効果が高いと感じました。
以上のように、対面、オンラインそれぞれに良い点があるため、来年度以降、再び全面的に対面授業となった際には、昨年度、今年度のオンラインでの授業経験を生かし、対面授業の中にも、まなびネットによる課題提出や資料提示、質問対応やまた意見交換を取り入れた授業を実施していきたいと考えています。